

精巣癌 肺転移 腹部大動脈傍リンパ節転移 下顎リンパ節転移

ステージⅢc 当院治療 21 年経過

この患者様は男性です。平成 7 年 9 月にスキー場の草刈をしていた時、激しい咳込みが起こり、痰には血が混じっていました。検査のため、いろいろな病院に回され、大学付属病院で、末期の精巣癌（睾丸腫瘍）StageⅢc と診断されました。腫瘍マーカーの HCG の検査結果は、これ以上の測定は不可能な 90 万 IU/ml でした。

直ちに右睾丸の摘出手術が行なわれました。

その時、両肺、腹部大動脈傍リンパ節、下顎リンパ節に癌の転移が認められていました。

平成 7 年 10 月から 3 月まで、抗癌剤が通常量の 5 倍量まで投与され、HCG は 90 万 IU/ml 以上（基準値 1.0 mIU/ml 以下）から 2.3 IU/ml へと 100 万分の 1 まで低下しました

。HCG β は 1.1 ng/ml（基準値 0.2 ng/ml 以下）でした。肺には無数の転移が認められ、腹部大動脈傍リンパ節には鶏卵大の転移（図-1）が認められておりました。

この頃からブレオマイシンの副作用である肺繊維症（肺がスポンジ様になる）を合併し、呼吸困難で 2 回危篤状態となり、抗癌剤は中断されました。

もうこれ以上治療がないと主治医は判断され、ご本人の希望で、平成 8 年 4 月に自主退院なさいました。

そして、私が大学病院第 1 外科にて新免疫療法(NITC)を開発し治療を開始してからまだ 1 年と経たない平成 8 年 5 月が初診でした。当時患者様は 32 歳でした。

新免疫療法(NITC)単独での治療を開始すると、体調は良くなり、呼吸困難もなくなり、8 ヶ月後のマーカー値は、HCG が 0.4 mIU/ml 以下、HCG β サブユニットは 0.1 ng/ml といずれも基準値域内となりました。

9 ヶ月後の平成 9 年 2 月の画像診断でも、肺転移は著明に縮小あるいは消失し、鶏卵大の大きさだった腹部リンパ節も約 1/3（うずら卵大）に縮小しました（図-2）。

7 月からは、県職員に復帰し、翌年の平成 10 年に開かれた長野オリンピックでも職務をまっとうされ、記念に頂いたメダルを私に下さいました。

その後、平成 13 年までは毎月来院されていましたが、平成 14 年からは 2 ヶ月に 1 回へと来院回数を減らし、服薬も IL-X を 1 日 1 回 2.0g のみと減らしました。

Th1 サイトカインの IFN γ と IL-12 が初めて測定可能となった平成 9 年 6 月（治療開始 1 年後）に、この方の免疫能力を測定した結果、臨床的に著効を示した如く、IFN γ は 64.6 IU/ml および IL-12 も 103 pg/ml と強力な免疫能力を持っていたことが明らかとなりました。この力はそれ以後も維持し続けております。

平成 17 年 10 月秋に結婚されるとのことで、5 月に精密検査をし、CT 検査の結果（図-3）にて癌は完全消失と判断されました。そして、予定通りご結婚なされました。

平成 29 年(2017 年)5 月現在、忙しい日々を過ごしながら、再発予防を目的に、健康食品 ILX-K を 1 種類のみ続けられています。

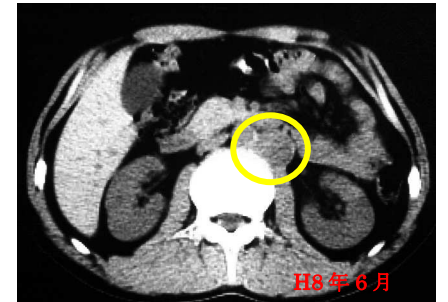
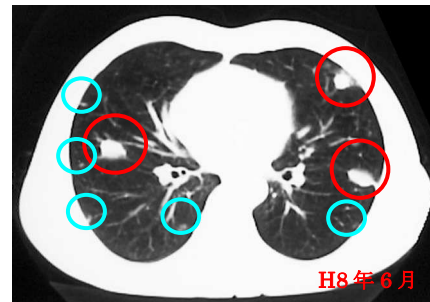


図 1 治療開始前

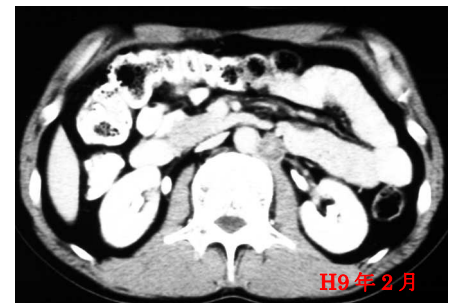


図 2 治療開始後 9 ヶ月

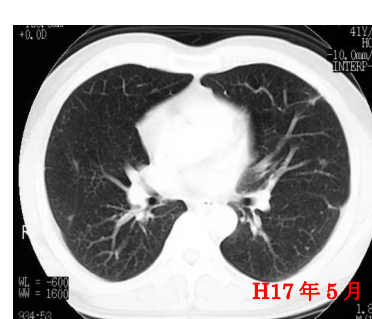


図 3 治療開始後 9 年